# 「情報分析」×「ディスカッション」児童の主体性を生かしたプロジェクト

子どもたちが自ら学級づくりに参画する、新たな学級経営システム「学級力向上プロジェクト」（開発者：早稲田大学教職大学院教授田中博之先生）。いじめがない、安心できる学級づくりに向けて、実践する学校も増えています。7回目の今回は、学級力向上プロジェクトを推進して4年目を迎えた京都聖母学院小学校・清水生恵（たかえ）先生の取り組みをご紹介します。

## 児童も課題を共有できる「学級力アンケート」

京都聖母学院小学校の清水生恵先生は、学級力向上プロジェクトを始めて、今年で4年目。2017年度から3年間は1年生で、今年度は5年生で実践しています。導入のきっかけは、学級力の状況を可視化する「学級力アンケート」に魅力を感じたからだといいます。

「学級力アンケートは、その結果をレーダーチャートの形で、教員だけでなく、子どもたちにも具体的に示します。この点が、QUアンケートをはじめとした、ほかのアンケート調査と大きく異なるところです。

弱点や課題を含めて自分たちのクラスの実情を子どもたち自身が認め合い、その原因などを自ら分析することで、学級経営に参画していく。それが子どもたちの主体性を育み、ひいては学級の自治力の向上につながると考え、導入を決意しました」（清水先生）

## 活発な議論を導くために

学級力向上プロジェクトを進める上で、清水先生が重視するのは情報分析と活発なディスカッションです。「レーダーチャートは自分たちのクラスの実態を映し出した鏡のようなもの。その鏡を低学年のうちから分析させることで、多面的に物事を考えたり情報を活用する力が養われます。同時に、その際に子どもたち同士で意見を交わすことも大切です。ディスカッションを通じて、子どもたちは友人たちから多様な意見を学び取るからです」（清水先生）

このレーダーチャート分析で、活発な議論を導くために、清水先生が昨年度から進めていることがあります。それが、「話さないと伝わらない」「言葉を選ばないと納得させられない」をキャッチフレーズに掲げた「対話タイム」の実践です。あるテーマ（お題）について、皆で意見を出し合い、優れたスピーチ内容やアイデアを称えます。

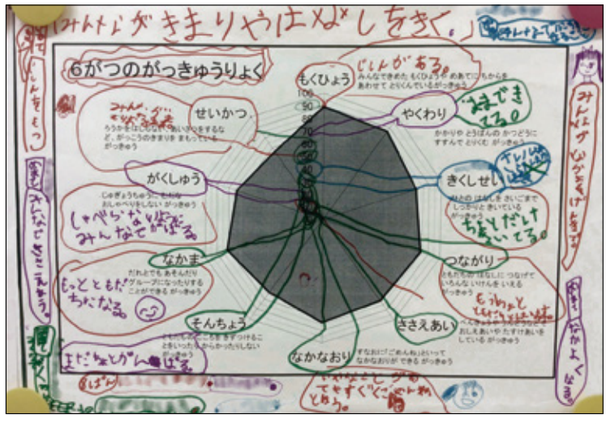
「肝心な点は、『魔法が使えるなら何がしたい？』『100円あったら何を買う？』『目玉焼きには何をかけて食べるか』など、あえて答えがないテーマをお題に設定すること。正解がないからこそ、子どもたちは自分なりの視点で、自由に意見を出し合えます。

普段から実践させることで、子どもたちの『ディスカッションの訓練』となるだけでなく、遠慮なく言葉を交わし合える学級の風土も形成されてきました。この土台があるからこそ、1年生でプロジェクトを実践しても活発な議論が展開されます」（清水先生）

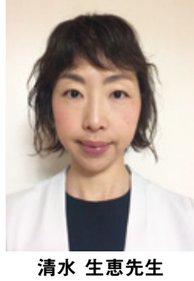
小グループで学級力レーダーチャートを分析（1年生）

## 学年が上がると分析力も高度に

では清水先生が実践する、学級会の時間（45分間）を利用した、レーダーチャート分析の具体的な授業内容をご紹介しましょう。




分析内容を余白にびっしりと書き込む（1年生）



清水 生恵先生

まず、あらかじめ行った学級力アンケート結果を、レーダーチャートの形で子どもたちに示し、第一印象や気づいた点を、全員で話し合うとともに、自分の意見をメモさせます。

次に、小グループ単位で、「数値が低かった原因は何だろうか」などをテーマに、より詳細な分析を加えていきます。出された意見を書記係がレーダーチャート用紙の余白に書き込んだ後、グループとしての意見を代表者が発表します。こうしたレーダーチャート分析と連動した話し合い活動を、年間4回ほど実施します。

「基本的には学年が上がっても実践内容は変わりませんが、子どもたちの反応は違います。1年生は数値の高低に着目して、『良いところと悪いところがあるということだな』と判断して、分析していきます。ところが5年生になると、『数値が低いところ同士は原因が類似しているな』と、異なる項目同士の関連性を考えるなど、より分析が高度になっていきます」（清水先生）

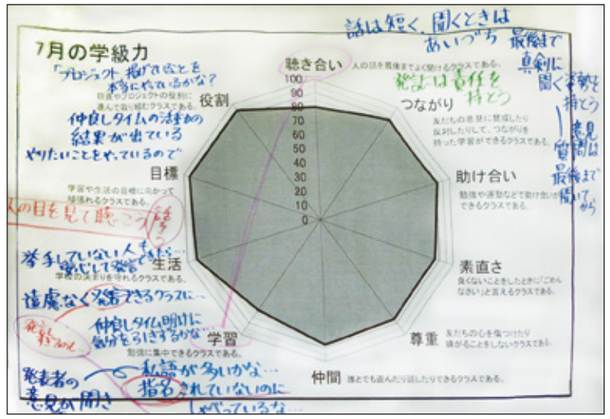
## SDGsと連動したプログラムも

今年度（5年生）は、学級力向上プロジェクトとSDGsを組み合わせたプログラムを展開するなど、新たな試みも始めています。

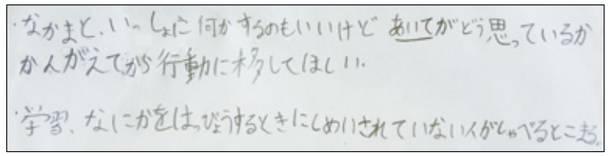
「今年度の総合的な学習の時間の学習テーマに設定しているのがSDGs。自分たちの教室の中で起こっている課題を基に、SDGsを捉え直したらどうなるかという観点から、ポスター制作も行いました」

これまで低学年と高学年で同プロジェクトを実践してきた清水先生。「学級力レーダーチャートは、学年にかかわらず、子どもたちが主体的に意見を述べるための素材として、非常に有効なことが改めて分かりました。これまで1年生の実践が中心だったため、課題解決のアクションを子どもたち自身が考えるという段階まで至りませんでしたが、今年度は、ぜひ具体的アクションを子どもたち自身で考え、行動できるレベルまで引き上げたいと考えています」と今後の展望を語りました。

SDGsと学級力を連動したポスター。「役割」「生活」の項目を根拠に（5年生）




分析内容がより高レベルに（5年生）




分析内容は個人でも書き留めることを推奨。
思考を巡らした足跡を文章にすることで、書く力が向上する（5年生）

### ◉デジタルアンケートを初めて実施

京都聖母学院小学校では、教育ICTの配備・活用が活発に進められており、子どもたちは学校に配備された教育端末と、個人のアカウントを用いて、ICT活用授業に臨んでいます。こうした教育環境を利用して、今年度初めての学級力アンケート（7月）はオンラインで実施しました。子どもたちは、自らのアカウントに配信されたアンケートに答えて、データを送信する仕組みです。清水先生は、「紙資源の節約になること、用紙の配布、回収の手間が省けること、子どもたちの回答がドライブ上に保存されるので、情報保管が容易で安全であること、さらには欠席した児童には自宅PCから回答してもらえることなど、デジタルアンケートには多数のメリットがあります」と話します。

デジタルアンケートの画面